

遺井 跡寺

ITERA ISEKI

嘉島町教育委員会

2019

序

平成28年4月14日午後9時26分に発生した前震をはじめとした一連の地震により町内でも多くの建物が倒壊・損壊し、復興の途についたものの未だ傷跡も生きしく残っている所、更地の状態のままである所も見受けられます。

今回は、地震で被害を受けた住宅の再建に伴う発掘調査の成果を報告するものであります。

本遺跡からは、縄文時代から古代にかけての資料が出土し、長い期間この場所が当時の人々によって利用されていたことが明らかとなりました。井寺遺跡そのものは以前から認識されてはいましたが、本格的な調査というものは今回が初めてのものとなります。

出土した資料は、嘉島町公民館に保管されており、今後広く活用されることを待ち望んでおります。本報告書を通じて学術的な側面への貢献だけではなく、文化財保護に対する关心と理解に貢献できれば幸甚です。

最後に、文化財保護の趣旨を理解し、調査に際して便宜を図っていただいた関係者各位に厚くお礼を申し上げます。

2019年3月 嘉島町教育委員会 教育長 高野 隆

例　　言

- 1 本書は、平成28年熊本地震復興事業（個人住宅建設）に伴う、熊本県上益城郡嘉島町井寺所在の井寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、嘉島町教育委員会が主体となり、社会教育課が調査を担当した。
- 3 資料の整理は、嘉島町公民館で実施した。出土資料及び記録は、同公民館及び上島倉庫に保管されている。
- 4 発掘調査時の写真は、橋口剛士が撮影し、遺物写真については、牛島茂が撮影した。
- 5 本書の執筆・編集は、橋口が担当した。
- 6 土層及び土器胎土の色調を示す際には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。

調査及び整理作業に際して下記の方々にご助力いただいた。

【発掘調査】（順不同、敬称略）

清水眞須江、永井静子、村上惇子、森嶋まち子、木村崇、中石隆一、守永ルイコ、
菊池由美子、後藤章一、森下富子、山村俊範

【整理作業】

森田ミドリ、平井和子、奥村朝子、岩野一子、永田清美、森島ユリコ、林伸彦、
吉田和子、前田和子、溜潤俊子、石田敦子、山内洋子、宮守富子、大川好美、高田清香、
塩田喜美子、結城あけみ、土田みどり、山田由美、田中裕子、岩下恵美子、平川恵里子、
緒方聰美

目 次

第1章 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯	· · · · · 1
2 発掘調査の経過	
3 整理等作業の経過	

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	· · · · · 2
2 歴史的環境	

第3章 調査の方法と層序

1 調査の方法	· · · · · 4
2 調査の経過	
3 層序	· · · · · 7

第4章 調査の成果

1 竪穴住居	· · · · · 8
2 不明遺構	· · · · · 10
3 一括遺物	

第5章 総括

1 井寺遺跡について	· · · · · 18
2 井寺遺跡の周辺について	

調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯

(1) 事業計画の概要

本報告の対象となった事業は平成 28 年熊本地震で損傷した家屋を建て壊し、新たに専用住宅を建設するものである。

(2) 調査に係る調整及び法的手続き

事業者から平成 30 年 9 月 8 日に法 93 条による届出があった。事前に照会がなされていない土地であったため、地番を基に遺跡地図を照会したところ、当該地は包蔵地「井寺遺跡」の範囲内であった。これを受けて確認調査が必要となることを回答し、確認調査の日程を調整することとした。

平成 30 年 9 月 13 日に建設予定の区画において、重機によるトレーニング調査を実施した。地表から 30cm 程度までがれき等が埋まっており、これを除去したところ土器や焼土・かまど粘土らしき白色の粘土が散乱していることが確認された。

ちょうど遺構の真ん中付近に当たったと判断されたことから、一旦ここで掘削を止め、広がりを確認するためにもう一ヵ所にトレーニングを設定し、掘削することとした。こちらでも同様にがれきが埋まっている部分の下から遺構及び遺物が地表面下 50cm において確認されたことから事業予定地内に遺跡が広がっていること、事業予定深度に比べて非常に近いことが明らかとなった。

上記結果を踏まえ、現時点の計画であると本調査が必要なことを伝え、工事計画の変更ができないか打診したところ、計画の変更是難しいとのことであったので本調査を実施することになった。発掘調査に至るまでの届出等に関する書類の処理は以下のとおりとなる。

法 93 条による届出 平成 29 年 9 月 8 日

確認調査の実施 平成 29 年 9 月 13 日

県への進達 平成 29 年 9 月 21 日

(嘉教社第 551 号)

法 99 条による通知 平成 29 年 9 月 21 日

(嘉教社第 597 号)

(3) 発掘調査と整理等作業の体制

地震発生前から継続している調査及び地震で被害を受けた井寺古墳の調査に職員 1 名、嘱託 2 名で対応している中ではあったが、緊急性を考慮して從前事業に嘱託 2 名、本調査に職員を配置することとした。

2 発掘調査の経過

(1) 調査の経過

確認調査の結果から、表土下に埋まっているがれきを取り除くとすぐに遺物等が出土する包含層に到達することが判明しているため、まず重機によるがれき除去を実施した。埋め戻しの際にこれらを堆土と混ぜるのは好ましくないことから堆土を置く場所とは別にがれきを積んで残置しておくこととし、工事業者に施工の際これを処分するよう依頼した。

重機による掘削が終了した時点で作業員による掘削作業を実施し、併せて井寺古墳に設置した基準点から現場まで測量を実施し、座標及び標高を持った杭を 2 カ所に設置した。これらに並行して 5m のメッシュ杭を設置した。

調査は、表土掘削後 30cm 程度を人力により掘削し、平成 29 年 10 月 26 日に調査を終了した。調査の詳細については、第 3 章において述べることとする。

3 整理等作業の経過

平成 29 年度において洗浄・註記作業を実施し、翌平成 30 年度に接合、実測、清書作業等を行った。

遺跡の位置と環境

1 地理的環境

(1) 遺跡の位置

井寺遺跡は、熊本平野の南東部、緑川・加勢川が西走する間に挟まれて存在する嘉島町の東端付近にある小高い丘陵地（以下「井寺丘陵」と称する。）にある（第1図）。布田川断層により南側にある北甘木丘陵とは独立した丘陵地形を呈しており、両者の間には断層により生じた低地が広がっている。

今回の地震で大きな被害を受ける原因となつた布田川断層は、こうした地震被害をもたらすものである一方で、この周辺の基礎となる地盤である砥川溶岩を断裂させ、豊かな地下水を生み出す側面も有しており、一時的に大きな被害を受ける以外は常にその恩恵にあずかっているため、受益期間の方が長いように思われる。

こうした環境にあり、古くから湧水を背景とした土地利用がなされていたことが周辺の発掘調査及び今回の調査によって明らかになりつつある。

(2) 遺跡の範囲

井寺遺跡の範囲は、井寺丘陵の頂部一帯に存在しており、その最も標高が高い部分には国史跡井寺古墳が含まれる。なお、今回の調査成果により遺跡の範囲はこの部分に留まらず、低地部分に向かって広がりを見せるのではないかと推測されることから、今後注意して試掘調査等を実施して範囲確認に努めていくものとする。

(3) 遺跡周辺の地形環境

前述のとおり本遺跡は湧水地帯を目前とした小高い丘陵状にあり、今回の調査地点は丘陵から低地に下る寸前の緩斜面上に存在する。湿地帯であった低地部分を耕作が可能なように地形の高まりを削って埋めるということを江戸時代の終わりあたりから繰り返していたと見られ、

さらに昭和以降の圃場整備により現在では台地や丘陵以外の低地部分においてはほとんど地形の起伏を感じられないほどに平坦化している。

2 歴史的環境

(1) 井寺古墳

本遺跡と同じく井寺丘陵の頂部に存在する。その中でも最も高い部分に築造されたものである。

古墳の発見は、幕末の安政4（1857）年に藪が崩れ開口して発見されたとされる。その後、大正5年に京都大学の濱田耕作博士による考古学的な調査が実施され、翌6年には報告書である『肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴』において巻頭を飾った。このことにより装飾古墳というものが世間に広く認知され、大正10年に史蹟名勝天然紀念物保存法により熊本県では初の史跡指定を受けた。

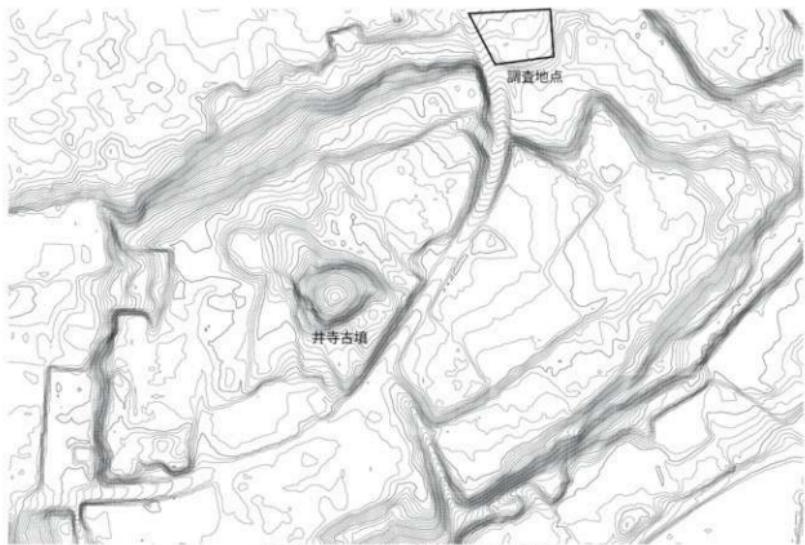
古墳の特徴としては、石材の持送りと内側を削り抜いた天井石によって高い天井を実現した所謂「肥後型石室」であり、玄室内は石障と呼ばれる板石で囲ってその内側を屍床部として区画される。玄門部の石障はU字形に削り抜かれる。これら石障に加えて羨門の袖石、羨道部の板石には直弧文と呼ばれる直線と曲線によつて構成される独特の文様と円文・梯子形文が線刻され、赤・白などで彩色される。こうした装飾に加えて阿蘇ピンク石として知られる馬門石やベニガラによる色調も相まって、玄室内は極彩色の空間であったことが偲ばれる。

墳丘の形状は、発見の経緯ともなった墳丘を含めた周辺の土地の土取りによって大きく改変されており、残存した墳丘の状況から円墳であるとされてきた。

平成28年熊本地震により墳丘に亀裂が入るなど大きな被害を受け、現在復旧に向けた調査を実施しているところである。



第1図 井寺遺跡の位置



第2図 井寺古墳と調査地点との位置関係

調査の方法と層序

1 調査の方法

(1) 発掘区とグリッドの設定

調査地点の座標できりが良い X:27265.000 m、Y:20780.000 mを原点とした5m間隔のグリッドを設定し、原点を基準として南北にA～C、東西に1～4のグリッド記号で区別することとした（第3図）。

(2) 表土の掘削と遺構の検出

調査区の設定後、重機により表土及びがれきを除去した。表土除去後調査区内のおよその部分にがれきが堆積しており、これらの除去後包含層はかなりでこぼこした状態となった。そのため、人力による掘削によりこれらを平らにし、遺構検出が可能な状態に持って行った。

(3) 写真撮影

調査に際して必要な情報を記録するためにデジタルカメラ（ニコン社製D810）による写真撮影を実施した。また、遺構記録の方法としてSfM/MVSによる3次元モデルを構築するためにはコンパクトデジタルカメラ（リコー社製GR II）による撮影を実施した。

(4) 整理等作業

整理作業について、作業員による洗浄、註記作業を経て接合作業、実測作業、済書作業を直営で実施した。作図については、手実測を基本とし、一部の遺物については写真計測を実施した。済書についてはデータの汎用性を考慮してすべてデジタルトレースとした。なお、遺構図の一部には先述のSfM/MVSによる3次元モデルから作成された画像を下図としてデジタルトレースを絞た図面を作成した。

2 調査の経過

調査の進行については、記録された日誌を元に抄録を示す。

9月 22日

表土剥ぎを実施。想定はしていたが調査対象範囲のほとんどにがれきが堆積し、断面にして約10～50cm程度の厚さとなる。これを除去するが調査終了後これをそのまま埋め戻すわけにはいかないので排土とは別にして敷地内に置くこととする。表土剥ぎ自体は1日で終了した。

10月 3日

実質的な調査開始。調査区の整備を実施する。井寺古墳に設置された基準点から調査区へ座標点を移動させ、これを基準に5mメッシュを作成、同時にメッシュ杭を打設する。調査区枠を

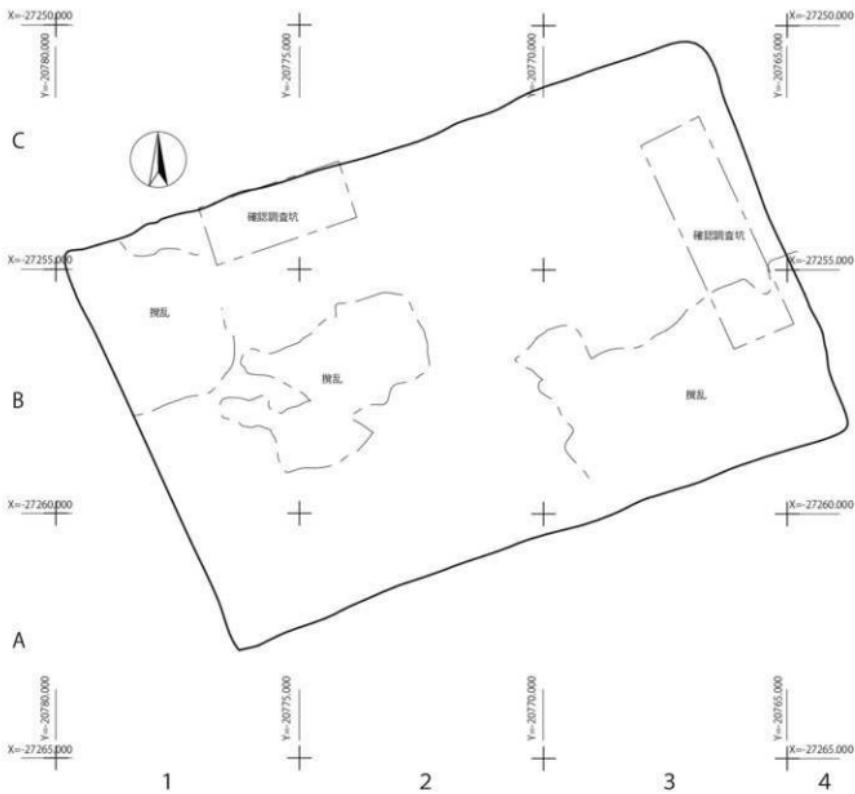


計測する。

10月 4日

表土剥ぎ時点での遺構精査を実施。南側ではニガ層が露出しているものの北側では旧整地層である2層が残存しているため2層の除去を開始。およそ旧地形は現在の斜面とほぼ同じ傾きであると推定される。2層からかなりの土器が含まれるが多くはローリングを受けており、削平に際して混ざり込んだものと思われる。掘削が進行するにつれて遺物も大きく、角が立つものが増えてきた。

10月 9日



第3図 調査区設定状況

2層掘削がおよそ完了したためニガ層上面での地表面を計測する。今調査から Sfm/MVS による遺構計測を実施することとしたためその試行も兼ねて地形計測を行った。結果は良好であり、今後遺構の計測についても実施していくこととする。

10月 11日

遺構精査を実施。ニガ面から住居址や土坑等が複数確認される。Sfm/MVS による計測をする際、現場では座標を持った紙を取り込む形で写真を複数枚撮影するだけで済むがこれをモ

ル化するための処理機材が拠点となる公民館にしかなく、そこまでデータを持ち込む必要がある。さらにそこから処理を経て平面図面のものを出力させるのに数時間要し、その間作業が止まる。現状調査員が一人の状態であるため休憩時間にデータを運び、処理機に流し込んだ後、現場に戻り終業後図面処理をするというルーチンとなっている。これだと効率が悪く、処理する人間が欠けると途端に現場が止まるというケースに陥るため、体作り（主に人材の）が急務と感じる。



10月 13日

土坑等の掘削及び記録作業が進行する。切り合ひ関係のない単純な遺構についてはほぼ記録を完了した。住居址等もプランを確定させそれぞれ SI01,02 と番号を振った。

10月 19日

調査区の北側で 2 層掘削時に同じ高さでニガ層まで到達しない部分があるのを確認していたが、これが遺構であることが判明し、プランを確認したところ不定形であり性格が不明であるため不明遺構（SX）として扱うこととした。およその軸に従って土層観察用ベルトを設定し、掘削を開始する。

10月 20日

不明遺構（SX01）の土層断面図を作成。これから出土する遺物は弥生時代のものが多く見られる。床面まで掘削が進行し、床面からも弥生土器が出土した。このことから性格は不明であるが弥生時代の遺構であると推定される。SI01 内に深い土坑が存在しているが、SX01 と同様に弥生時代の土器が出土する。同じ時期のものではないかと推測する。

10月 23日

確認調査時に確認された焼土を有するかまど付きの住居 SI02 の北側に瓶、高坏等が散乱する土器集中区がある。遺構に伴うものではないが複数の器種がまとまっているためもう少し形を出すように掘削した後、記録を取るものとする。瓶は薄手であり焼成が良い。日頃見慣れているものに比べて端正な印象を受ける。

10月 24日

何気なく調査区壁に刺さっている平べったい石を外そうとしてみたところ、石器ではないかと気づく。形を出すため壁を掘削したところ石製槌摘具であった。記録を取り、取り上げる。

10月 25日

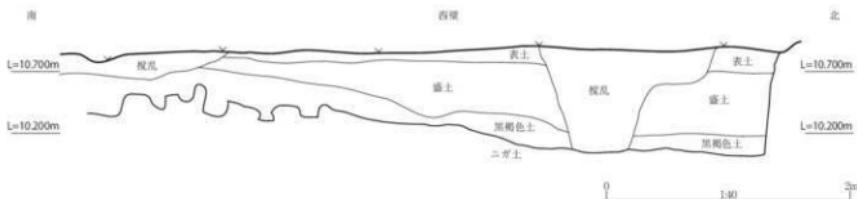
SX02 の掘削が完了する。これを以て調査区内の遺構は全て掘削及び記録が完了した。

10月 26日

調査を終了し、調査終了状況の写真を撮影した。

10月 30日

埋め戻しを実施し、完了した。がれきは残置し、工事業者が家の施工前に撤去することとなつた。



第4図 西壁土層断面

3 層序

がれき除去後すぐに包含層に到達するような状況にあり、後世の攪乱が相当程度及んでいる。

地山となるローム層（無遺物層）を含め火山灰性の風化土壤で構成されており、およそ嘉島近辺の丘陵地において確認されるものである。

正常な堆積状況であれば地表面からクロボク、アカホヤ二次堆積、ニガ、ロームという層順となるが、この地点は削平によりニガ以上の層をほとんど失っている。そのため検出される遺構についてもニガ層を切り込んだもの以外は消失しており、そこに含まれていたであろう遺物ががれき等に混じって出土する状態であった。

遺構埋土については、クロボクを起源とした土壤を基調とし、地山となるアカホヤ二次層やニガ土、ロームなどをブロック状に含む。

土層断面について、比較的よく残存していた西壁における南北方向の断面図を掲載した（第4図）。なお、東壁においてはがれき除去後すぐにニガ土である状況であったため掲載していない。

西壁における土層の所見については、下記のとおりである。

1 表土層

住居を解体した際のがれきを多く含む。自然層位ではないため、土色等の註記は省く。

2 盛土層

旧住居を建設する際に斜面を埋め上げたように思われる層である。本来の地形傾斜に対して、

南側の高い部分に合わせようとする意図が見られる。これも客土であり、自然堆積のものではないため土色等の註記は省く。

3 黒褐色土層 (Huel0YR2/3: 黒褐色)

盛土下に堆積する土層である。旧地形と思われる傾斜を呈している。クロボク起源の黒褐色を呈する。本来であればこの下層にアカホヤ二次堆積土が存在するはずであるが、この断面においてはそれが認められず、直下がニガ土という状況である。弥生時代～古代の土器片を含む。遺構埋土はこの層位の土層を主体とする。

4 ニガ土層 (Huel0YR3/3: 暗褐色)

ニガシロと呼ばれる火山ガラス等を含む土層である。非常に固く締まっており、クラックが発達する。住居等の床面として使用されることが多く、遺構の検出面となる。上層の黒褐色土層と同じように傾斜しており、本来この場所が緩斜面の途中であることを示唆するものである。

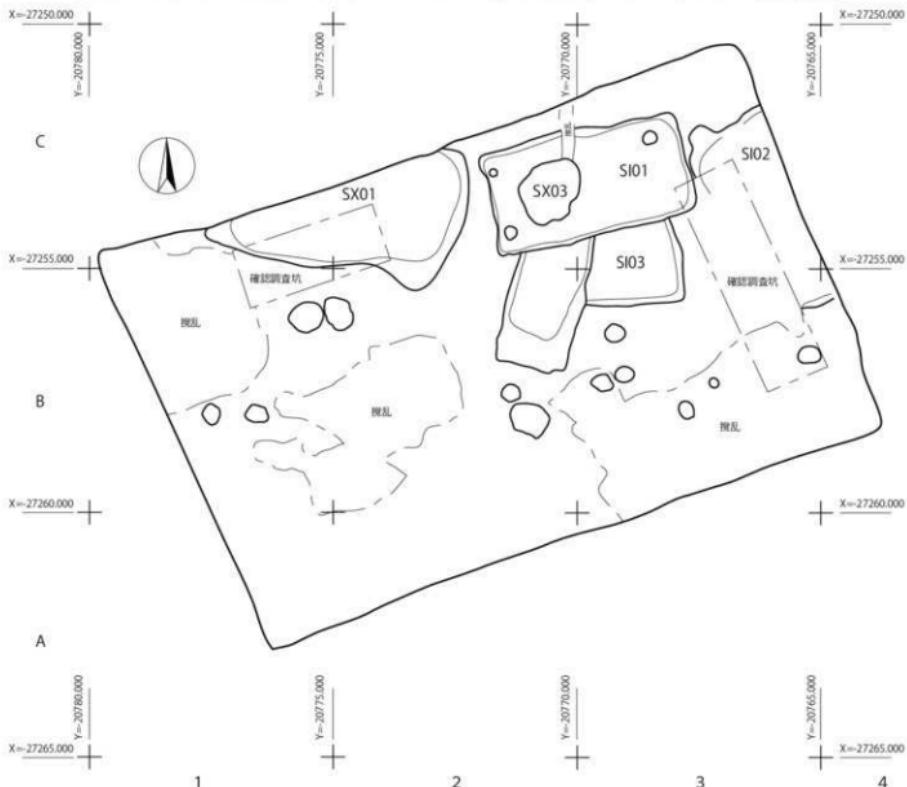
遺構の分布も南側（削平されている可能性もあるが）よりも北側に集中するのも、傾斜から平坦化し始める部分であることも影響していると思われる。

調査の成果

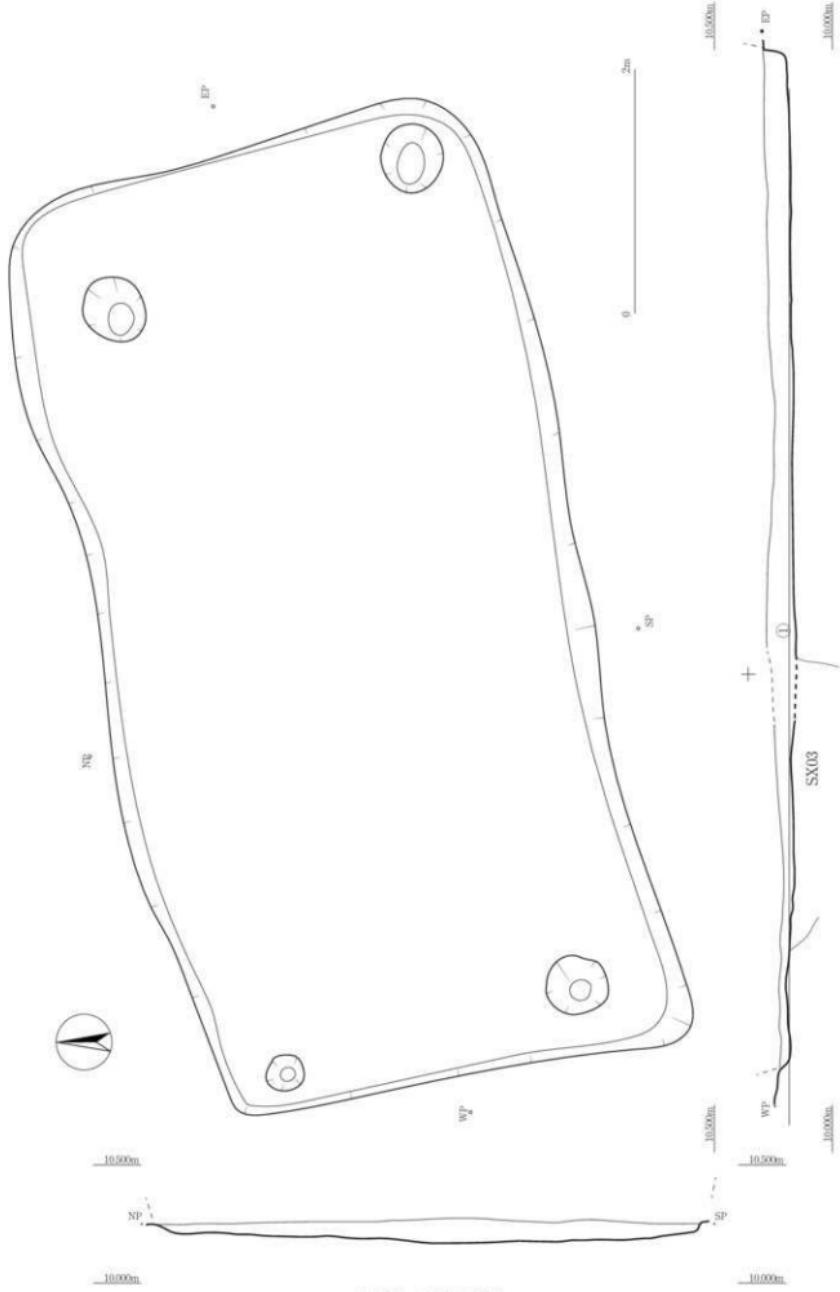
調査の結果、多くは土地の造成や住宅建造等で削平されていたが、いくつかの遺構を確認することが出来た（第5図）。そのうち時期がある程度特定できるものについて概要を説明する。

1 壺穴住居（SI01,02,03）

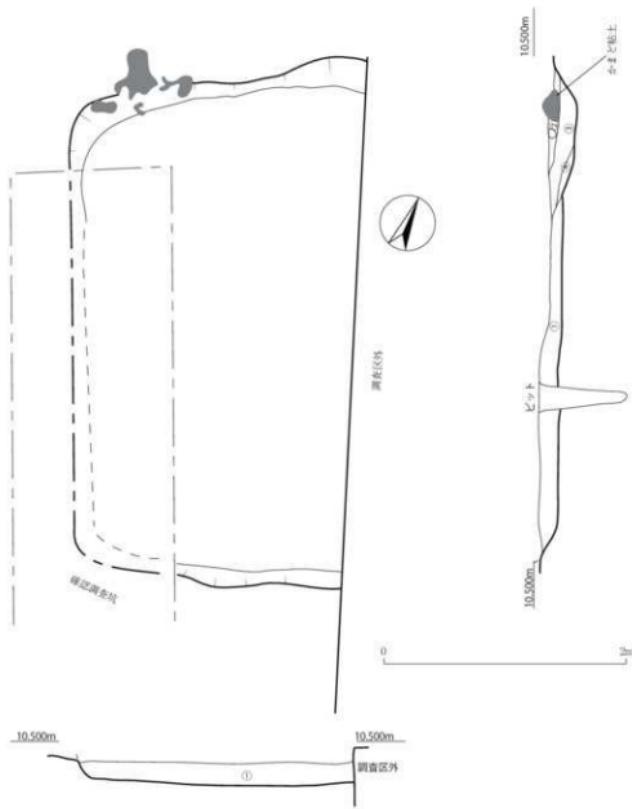
調査区の北東隅に3基、偏って分布している。



第5図 遺構配置図



第6図 SI01 実測図



第7図 SI02 実測図

ものが小片を除いて見当たらなかったため、遺物の実測図は省略する。

SX03は複数の遺構によって切られ、南東隅部分のみを残すものであるが、遺構中から9世紀あたりで見られる土師器の坏身が出土した(第9図)。このことからこれらを切る形で存在するSI01はこれ以降のものと推定している。

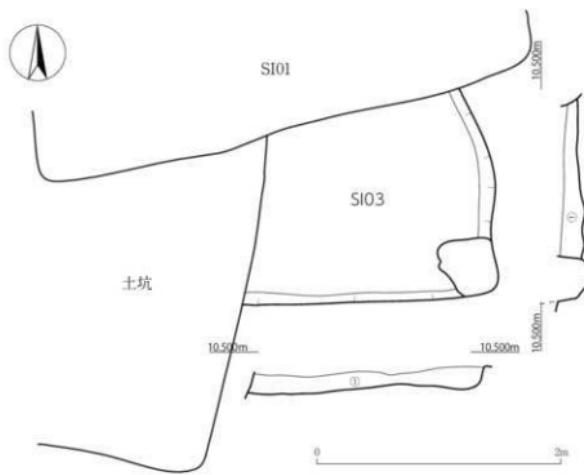
2 不明遺構 (SX01, 03)

調査区の北側に遺構が集中する傾向にある

が、古代の住居社等よりも深い位置に弥生時代に属すると思われる遺構が確認された。いずれも不定形であるため性質は不明であったため、不明遺構として扱った。SX03はSI01の直下にあり、SI01造成時に上部を失っていると思われる。ともに遺構埋土から弥生時代の土器が出土している。

3 一括遺物

大部分を削平で失っているためか、多くの遺



第8図 SI03実測図



第9図 SI03出土遺物



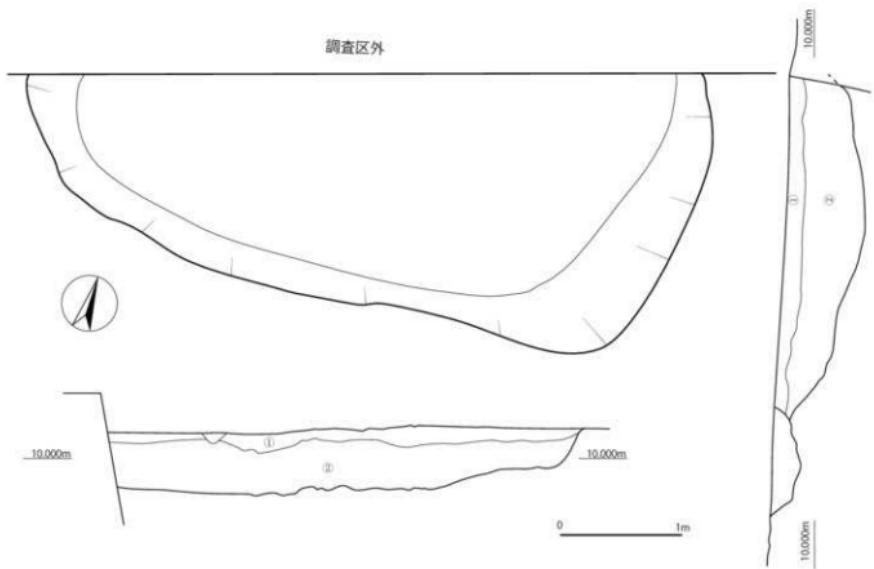
第10図 包含層出土遺物（1）

物が包含層から出土した。個別詳細については観察表を参照してもらいたい。

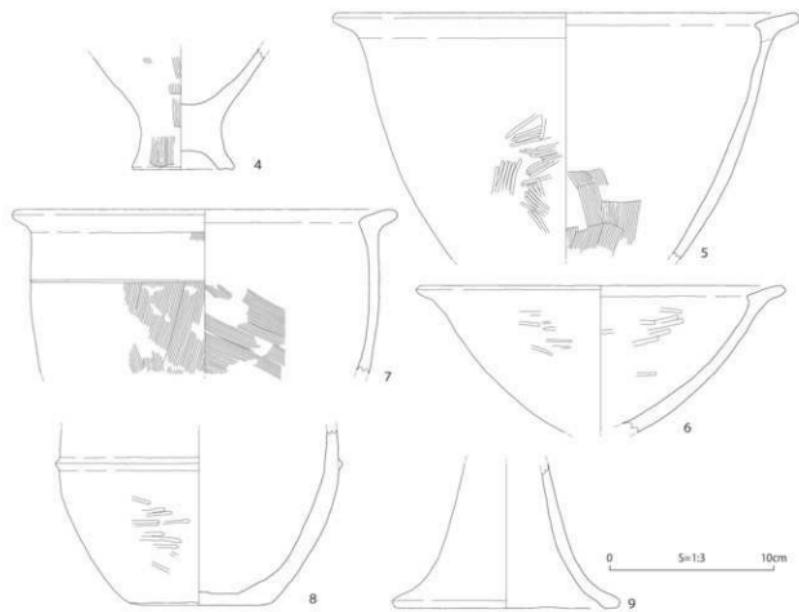
概観すると縄文時代の土器は少なく、中心は弥生時代～古代にかけてである。遺構に伴わないものの古墳時代のものも見られる。

弥生時代は中期～後期にかけてが最も多く見られる。またこの時期に伴うものと思われる石器も出土しており、石製穂摘具も見られる。また小片であるため全形は不明ながらも石材や穿

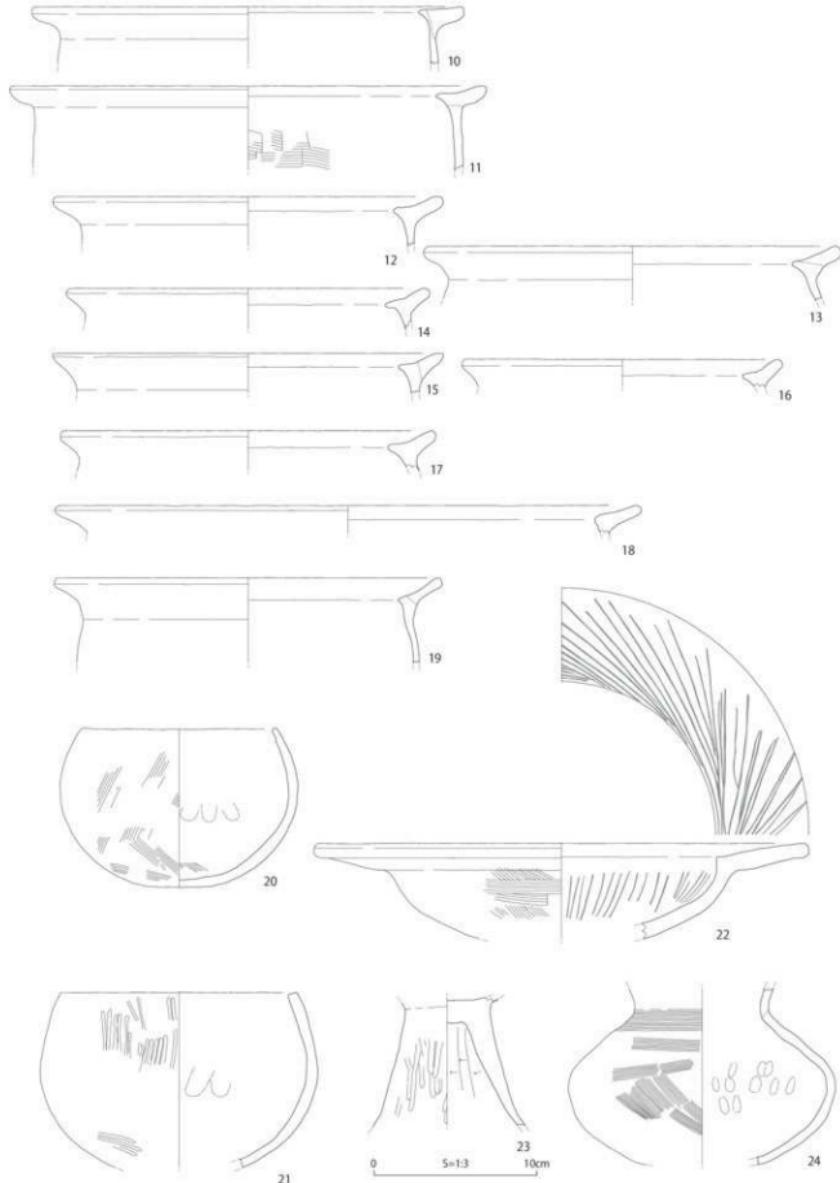
孔の痕跡が認められることからかつては石製穂摘具であった可能性があるものも掲載した。また、同様に包含層から磨製石鎌が出土している。これら遺物の存在は、北甘木台地と同様に弥生時代中期に水田経営を背景とした集落が付近に存在している証左になるものである。



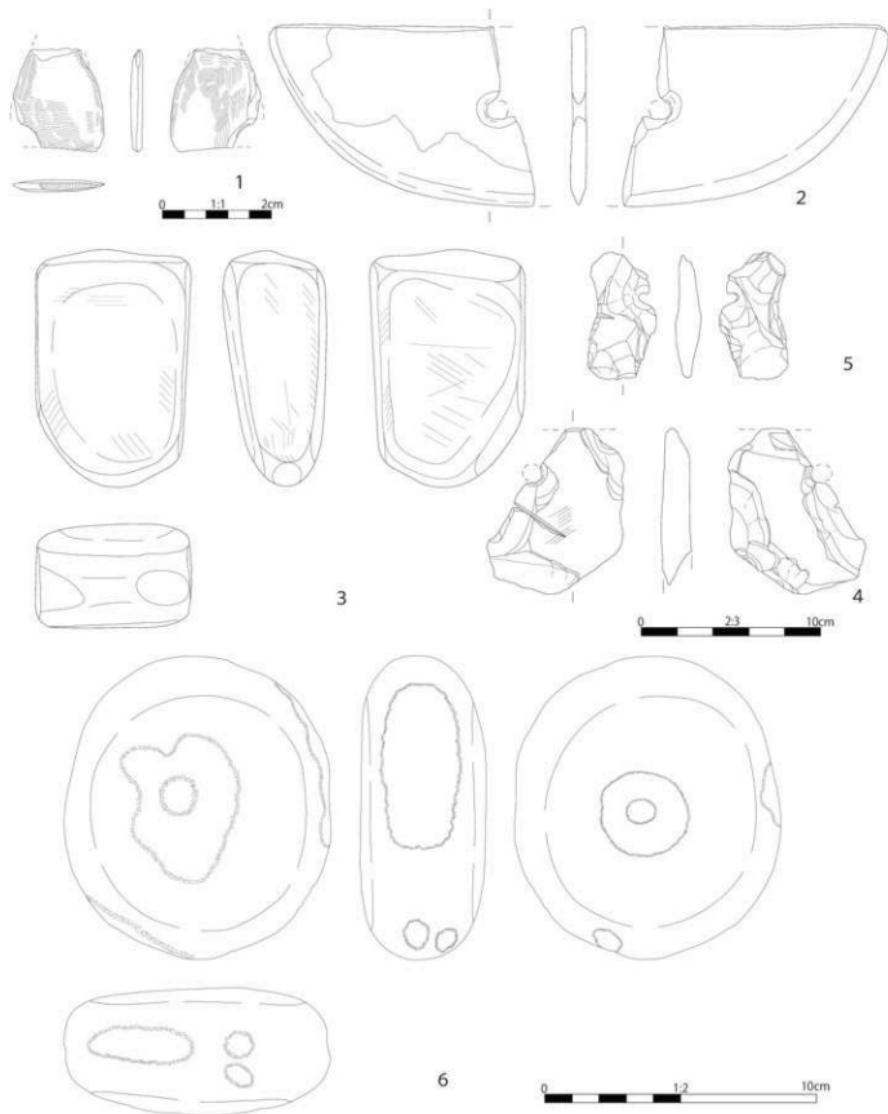
第11図 SX01 実測図



第12図 SX01 出土遺物



第13図 包含層出土遺物（2）



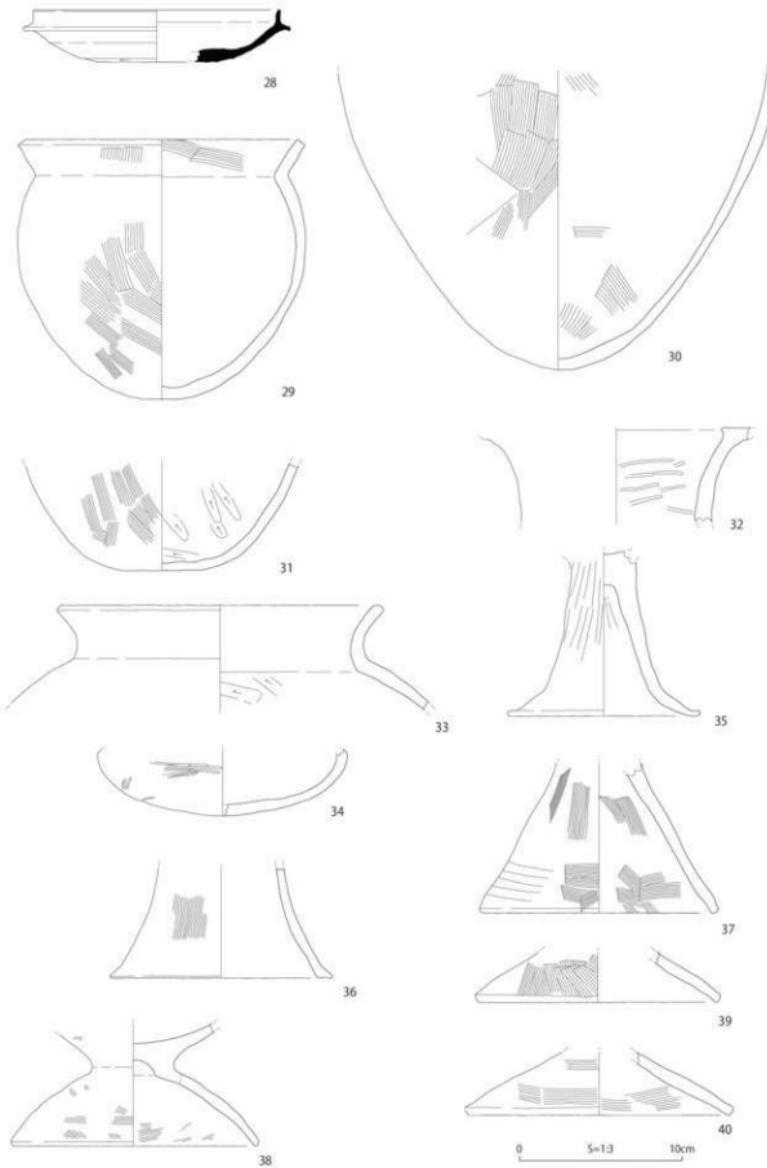
第14図 包含層出土遺物（3）

第1表 出土石器観察表

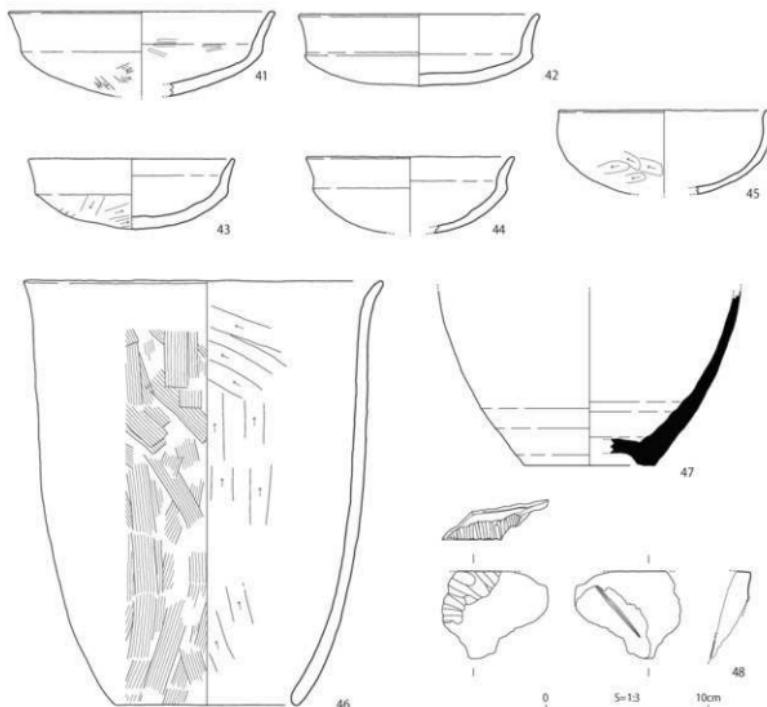
番号	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
1	2層	磨製石鎌	1.91	1.68	0.21	1.09
2	3層	石製槌揃具	5.04	7.36	0.48	24.40
3	一括	磨石	6.40	4.27	2.91	137.87
4	2層	石製槌揃具片?	4.68	3.81	0.80	13.95
5	2層	石製槌揃具片?	3.55	1.89	0.47	3.86
6	3層	敲石	11.23	9.88	4.65	785.86



第15図 包含層出土遺物(3)



第16図 包含層出土遺物(3)



第17図 包含層出土遺物（4）

1 井寺遺跡について

平成28年熊本地震で被災した住宅の再建が調査のきっかけとはなったが、本遺跡において埋蔵文化財の発掘調査が実施された初のケースとなる。

地表下50cm程度まで削平された影響によりそのほとんどを失ってはいたが、井寺遺跡の内容を物語る欠片を確認することが出来た。

今回は残念ながら井寺古墳と直接関係のある遺構などは確認できなかったが遺物を見ると近い時期の土器が含まれており、近隣若しくは削平によって失われた中に古墳に隣接する集落の存在をうかがわせるものである。

調査区壁から顔を出した石製穂摘具片や弥生時代の土器の存在から当該時期の水田経営を背景とした集落がこの井寺丘陵にも展開していることが明らかとなり、ここが湧水地を有する低地に面した微高地という好条件であることからも納得がいくものである。

また、8世紀末～9世紀にかけての遺物に伴って住居址が確認された。範囲が限られていたため全容の把握は難しいが、緩斜面に存在するステップ状の平坦面を狙って造営したものと思われる。他の時代でも同様に扱われてきたことから新しい時代の遺構によって更新され、結果として多くの遺物が包含層に含まれるということになったものと推測される。

井寺集落近辺の水田は、湧水により水に事欠くことが無い反面、常に湿地のような状態であり江戸時代～昭和初期の地誌を見る限り耕作に対する対応では相当苦労していたように見受けられる。

そうした状況を開拓するために高い土地から土を削って低い湿地帯に埋め、乾田を造成することに腐心していた。このため付近にある土地

の高まり（特に古墳などの塚）は土取の対象として削られ、現在に至ってはその地に立ってもかつてそこに塚があったことすら気づかないほどである。

さらにかつては水害常襲地と呼ばれていた本町では住居を少しでも高いところにという意図が垣間見え、標高がやや高い斜面を削って平らにして家を建てるにより地形は大きく改変されている。今回調査した地点でもそれは例外ではなく、辛うじて残った部分を今回記録することが出来た。この土地を境に道路を挟んで一段落ちる土地ではロームまで削ったあとに1mほど盛土をして、その上に家を建てている。そういう意味では本調査区は旧地形が残るぎりぎりの際の部分であったと言えそうだ。

2 井寺遺跡の周辺について

気になる点としては、井寺遺跡の範囲外、浮島神社を含めた北部の低湿地帯にその時代の水田が広がるのではないかという点である。現在に至っても湧水を背景とした良田が広がっており、この地に当時の水田があつても不思議ではない。現在は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外となつておらず、水田として利用されているため今後の開発はゆるやかであると予想されるものの、こうした状況を鑑みて調査を実施していく必要があると感じている。

今回の調査にあたり、文化財保護に対するご理解をいただいた地権者ならびに施工業者に感謝を申し上げる次第である。

第2表 出土土器観察表

項目	番号	通期	アソブ	黒	灰色	赤	白	緑	青	褐色	茶	黄	緑	銀
1	SH3	-	① 土器	古代	灰	口沿	(m)	断面	断面	断面	断面	断面	断面	ナフ
2	SH3	C4	① 土器	古代	灰	口沿	(m)	断面	断面	断面	断面	断面	断面	ナフ
3	-H4	H4	1 地文土器	縄文	深杯	口沿	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
4	SX01	C12	② 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
5	SX01	C12	② 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
6	SX01	C12	② 余生土器	古中	高杯	口沿	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
7	SX01	C12	② 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
8	SX01	C12	② 余生土器	古中	盆	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
9	SX01	C12	② 余生土器	古中	高杯	口沿	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
10	-H4	B3	2 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
11	-H4	C4	2 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
12	-H4	C3	2 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
13	-H4	B3	2 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
14	-H4	B4	1 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
15	-H4	E2	2 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
16	-H4	B3	1 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
17	-H4	-	1 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
18	-H4	B3	1 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ
19	-H4	B3	2 余生土器	古中	黑	口沿	断面	-	口沿	口沿	口沿	口沿	口沿	ナフ

地質 層号	透視 グリッド 番号	区分	剖面	岩種	岩位	口径 (cm)	断面 (cm)	測量対象	色調(外)	色調(内)	調査(内)	状況	備考
20	-45	C3	3	淡水土層	沖中	1.0m	~1.0m	長石・石英・角閃石 漂母・赤色鐵鉄鉱	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
21	-45	C3	2	淡水土層	沖中	1.0m	1.0m	長石・角閃石 漂母・赤色鐵鉄鉱	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
22	-45	C3	1	淡水土層	沖中	1.0m	0.9m	長石・角閃石 漂母	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
23	-45	C4	2	淡水土層	沖中	1.0m	1.0m	長石・角閃石 漂母・赤色鐵鉄鉱	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
24	-45	C3	2	淡水土層	沖中	1.0m	~1.0m	長石・漂母 赤色鐵鉄鉱	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
25	-45	C4	3	淡水土層	沖中	1.0m	0.9m	長石・石英 漂母・赤色鐵鉄鉱	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
26	-45	C3	1	淡水土層	沖中	1.0m	~1.0m	長石・角閃石 漂母・赤色鐵鉄鉱	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
27	-45	C4	3	淡水土層	沖中	1.0m	1.0m	長石・漂母 赤色鐵鉄鉱	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
28	-45	C2	2	原生岩	古地	1.0m	1.0m	長石 漂母	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
29	-45	C3	1	土壤層	古地	1.0m	~1.0m	長石・漂母 長石・雲母	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
30	-45	C4	1	土壤層	古地	1.0m	~1.0m	長石・漂母 長石・雲母	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
31	-45	-	1	土壤層	古地	1.0m	~1.0m	長石・漂母 長石・雲母	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
32	-45	-	2	土壤層	古地	1.0m	~1.0m	長石・漂母 長石・雲母	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
33	-45	B2	2	土壤層	古地	1.0m	~1.0m	長石・漂母 長石・雲母	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
34	-45	-	2	土壤層	古地	1.0m	~1.0m	長石・漂母 長石・雲母	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ
35	-45	C4	1	土壤層	古地	1.0m	1.0m	長石・漂母 長石・雲母	暗	暗	Hue075YR7.4 Hue075YR7.6	ナゲ ナゲ	ナゲ ナゲ

図 版



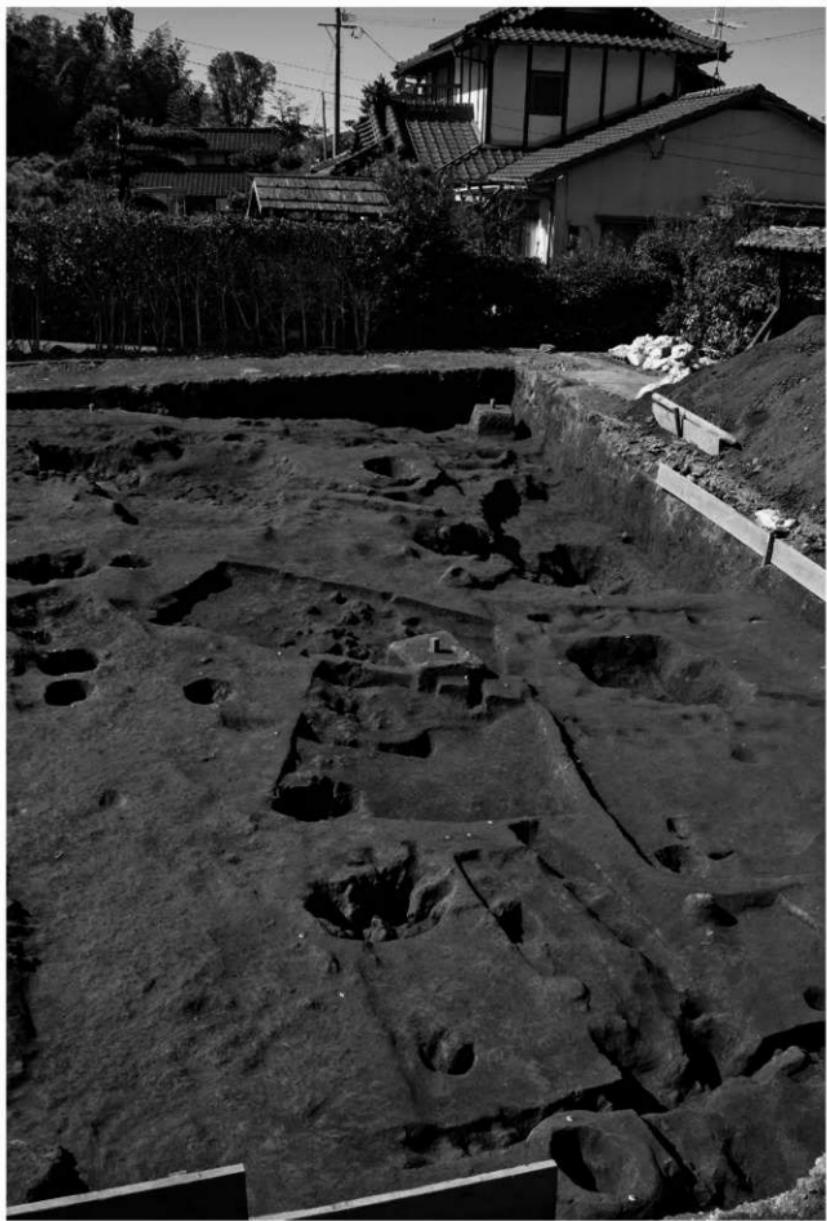
調査区近景



不明遺構 (SX01) 検出状況 (西から)



堅穴住居 (SI01) 掘削状況 (西から)



調査区完掘状況（東から）



井寺遺跡出土遺物





報告書抄録

ふりがな	いてら
報告書名	井寺遺跡
副題	平成28年熊本地震に係る個人住宅再建に伴う埋蔵文化財発掘調査

シリーズ名	嘉島町文化財調査報告書
番号	第4集
編著者	橋口剛士
編集機関	嘉島町教育委員会
所在地	861-3106 熊本県上益城郡嘉島町上島545
発行年	2019年3月

所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
井寺遺跡	熊本県上益城郡嘉島町 井寺字富屋敷2916	32° 45' 14"	130° 46' 41"	H29.9	114m ²	個人住宅建設

所収遺跡名	区分	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井寺遺跡	集落	縄文時代	-	縄文土器	
		弥生時代	土坑	弥生土器(甕、高杯)、 石包丁	
		古墳時代	土坑・溝	須恵器(杯、高杯)	
		平安時代	住居・土坑	土師器(杯、甕)	

嘉島町文化財調査報告書 第4集

井寺遺跡

発行 平成31年 3月31日

編集	嘉島町教育委員会 社会教育課
発行	嘉島町教育委員会 〒861-3106 熊本県上益城郡嘉島町上島545
印刷	ホープ印刷 株式会社

